令和６年度　小中一貫校まつのやま学園　学園経営方針

学園長　寺澤　隆志

＜学園の教育目標＞　　生き生きとした子ども

＜重点目標＞

○自己や地域を知り、夢や希望をもち、未来を切り拓く子ども
○仲間のよさに学び、関わり、つながりを大切にできる思いやりのある子ども
○自ら学び、考え、粘り強く責任をもってものごとに取り組む子ども
○地域の自然や歴史・文化に学び、ふるさとを大切にする子ども

＜めざす学園像＞

○「児童生徒」が安心できる居場所がある、挑戦できる環境がある学園
○「保護者」がまつのやま学園に子息を通わせることのよさを感じる学園
○「地域」が誇り、応援したい、協力したいと感じる学園
○「職員」が「志」と「情」をもち、協働的に目標の具現化を図ろうとする学園

＜学園経営の方針＞

１　学園の特徴

○小中一貫校として、義務教育９年間を見通した系統的な指導
○４・３・２制（３つの期）の採用と、６・３制のよさ、区切りの併用
○小学校段階での「教科担任制」の導入
○中学部職員の専門性を生かした小学部への乗り入れ授業の実施
○小中教職員の相互交流による「異校種理解」の促進及び融合
○小中連携による生徒指導上の問題に対する組織的な対応
○CS による「まつのやまタイム（生活・総合）」への地域住民の積極的な参画
○ALT 常駐による外国語活動の充実と全校「E＋タイム」の実施
○松之山の環境を生かした地域とともに創る「特色ある教育活動」の展開
（山菜採り・探鳥会・湯鳥駅伝&運動会、スキー関係諸団体との連携によるスキー学習、アウトドア部や自然科学部）
○中学部生徒主導による、児童生徒会活動や縦割り班活動の充実
○「雪里留学」等、地域外からの児童生徒受入れ体制の整備促進
○全国の「小中一貫小規模特認校」との情報交換及び交流
（R7 年度サミット学園開催に向けて、研修内容や教育活動を整理し、実践・記録を蓄積していく）
○小学部の複式学級による教育活動の展開（R9 年度より小学部は完全複式に）

２　「めざす学園像」具現化のための具体的方針

（１）学級経営を大切に　　**※子どもが主役の居心地のいい学級づくりの推進を**

ア　「学級」が安定してこそ「学校」が安定する。
イ　教職員と児童生徒との良好な人間関係が基盤。指導とフォローを意識して。
ウ　子どもとともに成長する教師。元気にあいさつ。清掃も一緒に。率先垂範の姿勢で。
エ　困ったら（困ってなくても）相談。チームワークが解決への道。
オ　よいところ、プラス面に注目。ポジティブな思考がいい結果につながると信じて。

（２）人権感覚を磨く　　**※不登校・いじめを生まない風土づくりを**

ア　「ちょっと待て」と自問自答する姿勢で。冷静に。誰に対しても誠実・公平に。
イ　自身の「差別意識」を自覚し、「多様性」を認める。
ウ　普段の児童生徒の言動に注意し、「いじめ」の顕在化を防ぐ。
エ　児童生徒にとって、「最大の教育環境」となる。
オ　一番大変な人、弱い立場にある人を優先的に考える。困った子は困っている子。

（３）保護者・地域との信頼関係を築く　　**※誰からも信頼される教師に**
ア　保護者のニーズを認識し、可能な限りそれに応える。
イ　学校には「サービス業」的な視点が要求されることも。相手を意識した対応が必要。
ウ　今日すれば「説明」、明日になれば「言い訳」。誤解を生まないために連絡は丁寧に。
　　＊聞き取りや指導は複数で対応することが基本。
エ　謙虚さと誠実さを忘れずに対応。伝えるよりも相手の話を聞くことを主に。

（４）指導のプロに　　**※一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援の充実を**
ア　「学ぶ楽しさ・分かる喜び」が感じられる授業を。教師は授業が命。
イ　「考えさせる授業」と「教える授業」のバランスを。
ウ　始業・終業時刻を守る。休憩時間を大切に。
エ　授業の UD 化を意識して。誰にとっても学びやすい手立てを。
オ　笑う授業には福来たる。授業が活性化するための工夫を。話題、話術、リアクション等。

（５）精神的ゆとりをもつ　　**※非違行為の根絶とプライベートの充実を**
ア　仕事もプライベートも大切に。勤務時間を意識して。私生活の充実が仕事の充実にも。
イ　「自分は大丈夫」「私は関係ない」と思わない。ヒヤリハットに注意。
ウ　自分の不幸は「みんな」の不幸。非違行為を生まない。
エ　つまらないことはみんなで共有。我慢はし過ぎない。
オ　「報」「連」「相」で情報の共有を。朗報も苦情もみんなで分かち合う。

３　学園の課題

（１）管理職の在籍期間の長さ
　管理職の在職期間が比較的短い。学園長が代わるたびに学園の運営方針が変わるようでは保護者や地域の信頼を失う。そのため継承すべき取組が多くなる。変化を求めない・維持を望む地域と変化せざるを得ない学校とのギャップがある。基本的に学校は地域のためにあるというスタンスが大切。

（２）児童生徒数の急激な減少
　Ｒ６年度より、入学児童が激減する。今年度から複式学級による指導に戻る。（Ｒ６入学は３人、Ｒ７は３人…。Ｒ９には完全複式、R10 の小学部児童は 19 名に。

（３）小学校と中学校文化の違い
　組織において人の数は力となる。小学校と中学校の併設により職員数が多い。乗り入れ授業の実施により、小学部教職員には時間的余裕が、中学部職員には報酬が生まれる。一方、学校文化の差もあり、相互のコミュニケーションを怠ると思わぬくい違いを生むことにも繋がる。

（４）地域の実情
　学校統廃合を繰り返し「松之山」「松里」「浦田」「布川」「三省」と５つの地区の思いが複雑に交差している。地域の目を気にする保護者が多い。
　狭い地域での固定化した人間関係。１～９年生まで構成メンバーが変わらない→高１ギャップ。